

政治・メディア・政治漫画(1)

政治漫画研究序説

茨木正治

I 問題の所在

II 政治シンボル論と政治漫画

(1) 政治シンボル論の系譜

1. 「シカゴ学派」——メリアムとラスウェル——
 2. M・エーデルマン——政治儀礼と政治言語——
 3. シンボル操作研究の流れ
 4. 日本の政治シンボル研究
- (2) 隣接諸科学の政治シンボル研究

(以上 本号)

III

(1) 「効果研究」の系譜

2. 「現実の再構成」論と政治漫画
- (3) 批判学派の理論との関連

IV 結論と展望

I 問題の所在

政治漫画は多くの政治情報を凝集させるはたらき（「凝集機能」）と、この凝集された政治情報に対して一定の感情を喚起させるはたらき（「喚起機能」）を持つ。これら二つの機能はシンボルの諸機能に含まれる。^①

また、政治漫画は情報の内容が政治に関するものであるだけでなく、上述したシンボルの機能を表出させる方法もまた「政治的」である。たとえば、PKO法案が成立したときの法案に対するメディアの理解は、これによって日本の「国際貢献」の内実ができあがり湾岸戦争で求められた西欧諸国からの要求に一定の回答を得たというものであった。ところが、このような全体的色調の論調と記事を掲載した新聞のなかに、PKOの派遣の「赤紙」に恐れおののく自衛隊員の姿を描いた政治漫画が掲載された。「国際貢献」という言葉がもつシンボルとしての多義的な意味を画像によって暴きだした政治漫画は、シンボルの「政治的な利用」といってよい。

このように、政治漫画は「表現要素」としても、「表現様式」としても政治シンボルとしての役割をはたしている。では、この政治シンボルとしての政治漫画を従来の政治学ないしマス・コミュニケーション論の研究のどこに位置付けることができるのだろうか。

政治シンボルの研究は、一九二〇年代のC・メリアム(Charles E. Merriam)らの「シカゴ学派」^②において政治の主観的側面の研究に関心が向けられたことから顕著になった。国家や主権の概念や、憲法を法学的・制度論的に考察する一九世紀的な政治の「外在的研究」^③に変わって登場した研究スタイルであった。ところがこの後、元を同じくする行動論政治学の台頭により、メリアム—ラスウェル(Harold D. Lasswell) —エーデルマン(Murray J. Edelman)と続く政治シンボル研究の流れは科学的実証主義の志向に背を向けるものであるとみなされ、政治学における傍流の地位に甘んじている。^③

とはいえ、最近になって政治シンボル論の重要性が再認識されつつある。心理学や経済学がいち早くとり入れた数量化志向に基づく科学的明晰性をそなえつつ、旧来の政治学が有する叙述的・思弁的な特性を持つ政治シンボル論の諸研究は、人文・社会科学の全領域を凌駕する「シンボルの森」を形成し学際化の傾向を強めつつある。政治漫画が政治の主観的な側面を対象としており、絵画の属性をも持っていることから人文・社会科学を繋ぐものとして政治シンボル論のなかに政治漫画を位置付けることができるだろう。

次に、マス・コミュニケーションとしての政治漫画の位置付けを考えることができる。政治におけるマス・メディアの機能は、「メディアクラシー」の概念を持ち出すまでもなく、受け手に大きな影響を与えている。この場合の影響力とは、議題設定機能の知見にならうと認知過程への影響力である。政治家や官僚に対して公衆はメディアを媒介にしてはじめてイメージを形成する。メディアは政治の「現実」をより各々のメディア特性が生かせるような「現実」に再構成して受け手に伝える。政治家の例をとれば、有能さを引き出すこともあれば敢えて「大賢ハ大愚ニ似タリ」と無能さを自らのイメージとしてメディアに描かせることもある。このようなメディアの「現実の再構成」機能に政治におけるメディアが大きく関与しているのは論を俟たない。

ところで、コミュニケーションはシンボルを媒介として成立する。政治家イメージをメディアを通じて描きだすことは、ことばや画像というシンボルを通じて受け手の認識世界を形成する。さらに、マス・メディアは受け手各自の認識や信念の体系のなかにシンボルによって共通のものを作り出す。その共有されたシンボル環境が受け手相互のコミュニケーション活動を促進させる。一コマという限られた面積のなかで「ことば」(説明語句、見出し)と画像(あるいは新聞内の文字と画像)との関係を描き出し、一定の方向へ認知と情緒をとともに喚起させるのは政治漫画のシンボリズムであるといえよう。

ところが、マス・コミュニケーション論の立場でも政治漫画はあまり関心の対象とされてこなかった。マス・コミ

ユニケーション論自体が効果研究に限っても一世紀に満たない新しい分野であることを割り引いても、政治漫画をマス・メディアとして認識することを欠いていたことが大きな要因であろうと考えられる。政治漫画が掲載されるのは主に新聞である。その新聞それ自体の分析はなされているけれども、活字メディアに偏る傾向があった。(たとえば新聞の写真の分析はあまりされていない)したがって、政治漫画の視覚メディアとしての認識は歴史学や心理学、美学などのマス・コミュニケーション論以外の研究に任せられ、マス・メディア研究としては辛うじて「利用と満足」研究に名をとどめるだけであった。

さらに政治漫画に内在する「笑い」の要素の研究が、マス・メディア論における研究に二の足を踏ませることとなった。「笑い」そのものの研究は人文科学全般で古くからおこなわれていたが、それゆえ体系化されておらずメディアの効果測定の障害となっていた。

とはいえ、前述したように政治漫画の内容分析を行なうことによって得られた知見から、政治学においては政治シンボル研究への道が開け、マス・コミュニケーション研究では視覚情報としての位置付けを加えることから政治漫画自体の研究と従来のマス・コミュニケーション研究とを繋ぐことができると考えられる。

本稿では政治におけるシンボル論とマス・コミュニケーション論を政治漫画研究という視点からとらえ直し、あわせて政治学・マス・コミュニケーション論における政治漫画の研究の位置付けを行なうものである。

(1) Sapir (1934) 参考文献は論文末に掲載。

(2) 政治学における「シカゴ学派」は、メリアムとその門下生を中核とする研究集団をさす。一九二三年にメリアムがシカゴ大学政治学部長に、翌年アメリカ政治学会会長に就任した二〇年代半ばごろから台頭した。

(3) 渡辺 (1993) によると、アメリカ政治学におけるエーデルマンの著作は『「チャタレー夫人の恋人」としての政治理論書』(R・メルマン)としての認知を学会に生ぜしめたとしている。また、「アルコールが入らないかきり、蔵有していることさえ口にせず、手にするときには、……表紙がみだりに人目にふれないように気をつけるといふ類の本」という評価を渡辺はメルマンから引き

出している。

(4) メディアとしてのマンガ理解にはこの他に、安川 (1994)、副田 (1983)、四方田 (1992) などがある。

II 政治シンボル論と政治漫画

(1) 政治シンボル論の系譜

1. 「シカゴ学派」——メリアムとラスウェル——

政治学におけるシンボル理論は、統一された名称をもたない。メリアムによる「ミランダークレデンダ」概念にみられるような政治シンボルの利用や、ラスウェルにおけるプロパガンダ研究でのシンボルの操作・機能の探求、社会心理学や社会学の知見を取り入れて政治と儀式・政治と言語との関連など政治行動を一連のシンボル過程として考察をしたエーデルマンの諸研究などは「政治学者のコードとなっている」(渡辺 1993)にも関わらず政治学の主要な理論の位置付けはされていない⁽¹⁾。

ここでは、政治シンボル論をロスマン (Rozann Rothman) に倣って「人間行動の原点にシンボルが深く関与していることを前提とする政治理論」(Rothman 1981 p285)と規定する。そうすると人間の政治行動を心理面で分析する研究である「政治の主観的側面の研究」は、政治制度や国家の機能を分析する「政治の客観的・外在的側面の研究」とならんで政治思想や政治哲学という形をとって表わされる。とすれば、政治の成立したところから政治シンボル論は存在したことになる。

とはいえ、近代の政治学において、政治制度論から袂を分けて人間の心理から政治行動観察する研究でシンボルの

存在・機能・操作に主眼を置いたものは二〇世紀まで待たねばならなかった。人間の行動の内面をとらえる(動機・意識・論理構造など)には、外在化された特徴のみが推論の根拠足り得るという立場にたつ行動主義の展開がシンボル研究の発達への「はずみ車」となった。

この行動主義的分析は、隣接諸学問(心理学・社会学・言語学・哲学)のシンボル研究の発達を促すとともに政治学にも波及し始めた。したがって、政治シンボル論の萌芽はイギリスにおけるウォーレス(G. Wallis)、アメリカにおけるメリアムらの研究に見つけることができる。メリアムやウォーレスの政治におけるシンボルの概念は言語と非言語とのシンボリズムの区別が十分ではなく、シンボルの存在と機能とを印象論的に考察するきらいがある。しかしながら、政治を人間の相互作用の結果としてとらえ、そのなかにシンボルの役割を設けて帰納的に事実関係の中からその役割を見いだそうとしたところに、彼らを政治シンボル論の先駆とみなすことができるのではないかと考える。

メリアムは、人間の持つ欲求——カオスへの恐怖と周囲の環境と自己との意味付け——と権力の正当性との相互作用を考える上で、「賞賛の対象」として「ミランダ」を、「信仰の対象」として「クレデンダ」をそれぞれ提示し、政治におけるシンボルを分類した。彼のシンボル論は、人間が政治的事象の重要性を認識する過程に記号(サイン)や象徴(シンボル)が相互に関連していることを前提として持っている。したがって、「ミランダ」や「クレデンダ」は政治領域における意味追求のための手段であり、それを権力が正当性の手段として用いるのである(メリアム 1973 p. 147-194)。

換言すれば、旗や儀式、音楽など人々の感性に訴える「ミランダ」も、政治理論や政治教義のように人々の理性に訴える「クレデンダ」も、ともに特定の権力者や権力集団にとっての民衆支配、人心の掌握といった目的を持つシンボル(操作)であるのと同時に、「ミランダ」「クレデンダ」を享受する人々にとってはこれらを通じて政治領域に自分たちが関与する気分を味わうためのシンボルであり、ここから政治への意味を見いだそうとするてがかりとなるも

のである。「ミランダ」「クレデнда」はメリアムが意図していたであろう権力への服従の道具としての民衆像を超えるものを提示したといえる。

メリアムの持っていた政治シンボルと権力との関係をより限定した領域としてとらえたのがラスウェルである。彼は政治シンボルがもつ権力活動の役割がシンボル関心の動因となると考え、その機能に焦点を絞り「政治権力概念の理解の補助」となる機能をもつシンボルを政治シンボルと定義した。反面、「経験的前提」可能なものに定式化を制限した——キー・シンボルの分析、政治神話・政治言語の内容分析——ために、機能偏重の誇りを免れず政治シンボル研究を政治的プロパガンダ研究や言語学的研究に矮小化させた点は否定できない。

さらに、マッキオンが指摘しているように (McKeon 1964 p. 15)、言語としての認知の有無を政治シンボル研究の制約とすると、実践的行動や美学上の構造・解釈の際に合理的かつ因果関係的な言語を用いても全て情念と権力の問題に還元されてしまう問題が残る。つまり、芸術そのものが持つ「政治性」をラスウェルのシンボル研究からは読み取れないということになる。言語で語れないシンボリズムをどのように表現するかが問題となる。また、政治的プロパガンダ研究においても、プロパガンダをはつきりとは意識しないで効果を得ているような「日常生活における宣伝効果の研究」についての考察をシンボルの機能から説明し、実証するといった点を彼の研究から見いだすことはできない (テレビのコマーシャル、ニュースショーなどのもつ効果がそれにあたる。もともとラスウェルの生きた時代を考慮する必要があるが)。説得の効果を相互作用の結果としてとらえる理解がラスウェルにあつたからこそ精神分析学の政治への援用がなされたのであろう。が、政治シンボルの設定の制約性が芸術上の権力関係の抽出に弊害をおよぼしたのは想像に難くない。

このようにシンボル理論の展開という理論的側面からみると、ラスウェルの貢献度は思いの外低いものとならざるを得ないが、政治の応用的側面において、あるいは後述するマス・コミュニケーション研究においては多大な貢献を

したといえよう。

(1) この問題については、高瀬(1986)、渡辺(1992)が言及している。高瀬によれば、「政治的象徴理論」はラスウェルが適用領域を偏らせたために、行動科学的政治学からの軽視を生み、のちのエーデルマンは本来行動科学的政治学の一部であるにもかかわらず、彼らからの批判——実証性への疑義——に対して十分な回答を表明できなかったために政治学での傍流とされた、としている。

2. M・エーデルマン——政治儀礼と政治言語——

①政治儀礼

エーデルマンの政治シンボル研究の背景には、シンボル形成は本来自由な人間の活動の一つであったのが政治の舞台で用いられた途端に、権力や支配の技術として使われるように堕したという認識がみられる。この政治活動へのシニズムがシンボルの役割についての大衆社会論的傾向を生じさせたと考えられる。

彼は、シンボルの意味をそれ自体ではなく行為主体に求め、社会や組織の成員がシンボルに意味や情念を作り出し増幅させると述べている。そして、「人々の成員集団は自分たちの世界を共有するイメージをシンボルによって形成し、共通の政治的利益を発達させる」(Edelman 1964 p. 11)のである。このシンボルの役割に支配—服従関係を介在させるのがエーデルマンの特色である。彼は、大衆の政治への反応が情緒的になることに着目し、それは政治シンボルに媒介されたものであることを説く。つまり、少数エリートがデモクラシー体制の中で多数の民衆の指示をどのように得るかをシンボルを通じて説明したのである。

彼の政治シンボル論の特徴として政治における「観客」(a spectator)の視点がある。この視点には二つの特徴がある。一つには、「観客」は政治を実際に行なっている少数のエリート層と同じように政治に関与している意識をシンボ

ルによって喚起させられることがある。もう一つには、逆に「観客」は政治に対する疎外感と諦観を持っているという点がある。舞台で演じられる芝居をみるように、政治は専門家集団の手によるものであって「観客」は彼らの演技に芝居と同一化するとともに、けっして舞台には上ることはできない存在である。だからよけいに芝居との一体感を得ようとするのである。この政治への参与意識と疎外感は、大衆の持つ個々の利益や価値と関わりをもっている。コストをあまりかけないでどのようにして利益を得るかという一種の「合理主義的」人間モデルの一面をこの二つの特徴から窺い知ることができる。

このような「観客」としての民衆の政治観に大いに関わっているのが「政治儀礼」のシンボリズムである。政治制度や政治システムの正統性を認識させる定型化された政治行動一般を「政治儀礼」とよぶ。選挙、投票行動、本会議における議会活動、政治家のメディア・パフォーマンスなどによる政治シンボルの提示が大衆の情緒に働き掛け、共通の意味付けが特定の政治的行動のみならず既存の政治制度や政治組織への価値判断をも含めてなされる。メディアがとりあげるこうしたパフォーマンスに影響され、選挙運動にかかわるだけで満足する（選挙そのものや制度・候補者の適性への十分な情報が得られないにもかかわらず）民衆の政治への態度がその例である。

前にのべたように「観客」は舞台で演じられる政治という芝居に感情移入し、政治の舞台で演じている「俳優」（政治専門家）と一体化する。ここにいたるまでには、舞台の芝居を観察する傍観者としての立場がある。「観客」は芝居の進行に伴って芝居に没入していくのだから、傍観者＝客観的な立場として芝居の当初は存在するのが普通である。この傍観者の立場は「観客」のもつ価値にもとづく。必ずしも「強固」な価値（イデオロギー、宗教的信仰など）が傍観者の役割を「上演中」も維持できるわけではない。強固なイデオロギーがちよっとしたきっかけで全く正反対のイデオロギーに転換することもある。また、「移り気」氣質が政治儀礼の覚醒から解放する力にもなりうる。こうみると政治は、演技をする側とされる側との技術の相互作用の結果によるものであるといえる。

しかし現代の「観客」の役割を担わされている大衆は、総じて信念体系の動揺を政治の舞台から受けているように見える。政治への疎外感は、政治的行為の「非日常性の提示」の繰り返しによって増強される。政治倫理の声が政治家の贈賄事件の発覚ごとに叫ばれる。が、証人喚問の要求による国会の紛糾が続くと「国会正常化」の声が生じ、検察の動きも鈍くなっていつのまにかウヤムヤにされてしまう。このような政治疑獄の「政治儀礼」性は人々の日常生活とは隔絶されたものである。また、幾度となく選挙の正常化が叫ばれても結局は地元の面倒をみる人間が当選する。選挙は政治参加を保証するものではなく、限られた「政治フリーク」の「マツリゴト」と認識される。

ところで、政治における一定の距離感は客観的な政治認識を生む契機となる。とすれば、政治への情緒的な同一化傾向と政治への疎外感とを比べれば後者のほうが政治の「客観的」認識に近いことは明らかである。そこで、「適切な政治的距離感」を保つことができないようにするくふうが少数のエリートに求められることになる。

現代社会の過大な情報量が「観客」としての民衆の信念体系を動揺させることと、上述した「演技」をする側の事情から、あるときには変化や脅威をおおることによって、またあるときには「内実」のない口当たりのみよいシンボルを大衆に提示することによって、政治への大衆の依存を強めるのである。(福祉政策の手法の中の「高齢化社会(への対応)」、「高福祉・高負担」というシンボルで消費税を導入したときの経緯がその例といえよう。)このシンボル操作のなかにエーデルマンは、「シンボルによる(大衆の)安心感の培養」(symbolic reassurance)概念を提示するのである。この「安心感」が政治という舞台で行なわれる政治儀礼によって確認され、既存秩序の正統化に寄与するのである。

これまでみてきたように、エーデルマンは大衆がエリートによって支配されるという大衆社会論の視点を踏襲しつつも、社会学や社会心理学における人間の社会的(政治的)行動のミクロな分析を通してシンボルの政治的な機能に言及している。政治シンボルによって人間は自らの経験と意味とを組合せ、予見が可能な秩序を形成させる一方で、

予見が可能でない情報の生成も行なうとし、情報への感受性が強くなると社会の動揺を生じさせるという認識をエーデルマンは持っていた。同時に、恐れ・希望の相克、言葉による役割の取得・自己の客体化などとの組合せが複雑な社会現象である政治現象を構成するとみなしていた。このような「新しい」性格を持つだけでなく、従来のシンボル研究者との知見を継承している。メリアムやウォーレスからは政治的人間の心理を、ラスウェルからは政治言語の分析に象徴される方法論的枠組みと精神分析への関心を受け継いでいる。

②政治言語

エーデルマンの政治シンボル論で政治儀礼研究と並んで特徴的な概念は「政治言語」である。⁽²⁾ 彼は政治における「話」(tale)の重要性を説く。政治における「ことば」はそれによって自分の利益の獲得を生じさせる手段であり、支配や権力を得る行為の正統(当)性の獲得にも繋がる。とともに、一定の型が「ことば」によって得られることを彼は重視している。この「ことば」による型は、政治の認識、態度、行動のすべてにわたって得られるものであるという。

「民主主義」という「ことば」が個人の尊厳を想起させ、「全体主義」への嫌悪をいだかせ、「民主主義の擁護」の名の下に他国への侵略を行なう場合をイメージするとよい。個々人が種々雑多な価値や信念を持つときに自分たちのまわりの環境を自分のものとしてとらえかえす「状況化」を行なう場合、シンボルによって定型化を通じて共通の意味や主張を生み出す。ここに政治社会における統合の契機ができる。特に政治社会においては共通の型ができることが重要であり、その型が正しいかどうかは⁽³⁾二の次である。ここにおいて、異質なものの相互の作用から共存の手がかりが生まれるというエーデルマンの「政治」の概念が浮かび上がってくる。

共存を政治の中心概念に据えたエーデルマンは、共存を生み出すダイナミックスの中に政治言語のシンボル化能力を求めた。彼は政治言語のみならず言語一般の特徴として、(a)具象・抽象作用の促進、(b)社会的な役割取得、の二つ

をあげている。(a)において、自らの環境外にある事象——象徴的な事象——への関心やそれらへの感情の喚起・収斂を示し、これらが言語の評価性として表れるとする。たとえば、政治に関する情報は大半が間接的な情報である。「保守二大政党制」ということばがマス・メディアを媒介にして「(英米)民主主義諸国」と合致すれば、「保守二大政党制」への収斂があたかも国是であるかのごとくみなされそれ以外の具象化を妨げる。「いったんコトバが集団の利益を表わすものになると、そのコトバはもはや叙述的ではなくなり、人心喚起的になる」(Edelman 1964 p. 125)と述べている。

ここから共存象徴(岡義達)の形成過程を政治とみるといっても、その間には権力の支配・被支配関係を前提としていることが読み取れる。抽象—具象作用と役割取得の作用とともに、それ以外のものを排除する収斂の機能があることに留意すべきである。ただし、収斂や統合の中に異物をどのように残すか、ここに政治シンボルとしての政治言語の働きがあるといえる。

このため、エーデルマンは言葉によって共通の意味を作り出し秩序への欲求にこたえと共に、安心感(体制への依存の促進——ツイテイケバアンシンダー——)を培養させる政治言語を生み出すことが政治の円滑化をもたらすとしている。そのとき、多面性・曖昧性を保つことによって意味の共有領域は広がり、安心感の前提となる「プライドを保持した上での服属」が可能となる。実際には変化の可能性が微少であり、多様性の品目は既にあらかじめ決められているとしても、「少数意見の尊重」を唱えれば政治的統合は促されるのである。⁽⁵⁾

③ 政治漫画との関連

1 政治儀礼と政治漫画

エーデルマンの政治シンボル論は①政治的儀式における政治シンボル、②政治言語における政治シンボル研究、の二つに大別することができる。①・②ともに政治の実践例が示されており、理論―実践の相互作用を意図した実証性を持っているが、総じて①は②の理論の反映という点が強。政治漫画研究との関連をみるならば、①の政治儀礼研究は、政治漫画シンボルをつくる諸要素の背景となる特徴において共通点をもつ。これに対して②の政治言語分析から描かれる政治シンボル論の特徴は、政治漫画の内容を伝える技術(レトリック)とそれらの相互連関を規定する「コード」(あるいは「絵画の文法」⁽⁶⁾)に対応する。以下、これらの諸特徴と政治漫画のシンボリズムとの関連について言及する。

政治儀礼を含む政治シンボル論の前提として、(a)シンボル形成者かつ使用者としての人間像、(b)人間存在の秩序づけとなる諸構造は社会によって役割が決まる、(c)諸構造を文脈が作り出し、制約を加える、(d)(b)、(c)より間主観性が生じ、シンボルの意味が共有される、(e)意味の共有は個々人の相違を弁証法的に止揚する過程を経て行なわれるため、意味共有の結果生ずる社会的事実には曖昧さが認められる、の五つがあるとされる(Rothman 1981 p. 289-290)。社会の既存の秩序や価値を人々に発見させ、人間が本来持つ秩序への欲求(シンボルの意味付けとして表れる)を充足させるのが政治儀礼の機能であった。上述の前提によれば、(a)、(b)に相当する。さらに既存秩序の正統化に寄与するはたらきを(c)、(e)により儀礼が促進させたといえる。

このような政治儀礼のシンボリズムに対し、描き手が構想する主張に人々を引きずり込む機能が政治漫画のシンボ

リズムに対応する。画像に描かれる出来事を認知し、同時に対立・連想される出来事を想起しうるのは、作品の大枠に既に読み手が捕われていることに他ならない。その認知の仕方の中に一定の枠組みをもって見る傾向を予期するのはそう難しいことではない。しかも、儀礼のような定型化が進んだものについては容易に枠組みを見つめることができる。このことは、描き手にとっても一定の反応が予期できるために彼ら自身にも作品への安心感を培養させる。⁽¹⁾

たとえば、世論が政治に反映されないことを描く政治漫画は、人々の無力な様相と政治家の脳天気なフルマイとの対比で描かれることが多い。政治改革法案、税制改革法案のいずれの場合でも法案審議の終盤になってこの手の政治漫画が登場する。あるいは、就任時はかなりの期待をもって描かれるが二・三ヵ月たつと「無能なリーダー」の烙印を押され、そのイメージで描かれる首相の登場する政治漫画(F・オフエル)も「儀礼化」(ritualization)の例といえる。

2 政治言語と政治漫画

前述したように、政治の言語は政治シンボリズムとして政治漫画の修辞技法と対応する。政治儀礼が政治シンボルの外枠・背景を形成するのに対して、政治の言語は政治行動や政治儀礼を概念化して人々に共有させる。それとともに政治行為のシンボリズムを読み解く鍵となる。この点において政治漫画の修辞技法(創案、意向、文体、記憶、所作)と対応する。

ここで政治言語と政治漫画との関連を考察するにあたり、媒介項目として政治的レトリックの視点を導入する。

政治レトリックは、政治行為の動機・原理・思想・理論・コミュニケーションの全ての領域にわたっており、政治的態度形成や政治判断の助成に役立つ。政治を支配のための技術としてとらえる場合でも、異質なものの同士の共存を図るために同意を得ようとする過程とする場合でも、いずれの場合でも相手の意向を自分に向けるための技術として

レトリックが求められる。いいかえれば、レトリックは「言葉それ自体が持つシンボル機能」に根ざし、「シンボルに反応して協同して行動する心を人間の本性とみなしてそれに訴えかける技術」(K・バーク)とみなすことができる。よって、政治言語はシンボル機能を媒介として説得から同意を生み出す政治レトリックを内包していることがわかる。ここで政治漫画もまた、描き手の意図に読み手の感情を収斂させていくための技法を持つから、政治的レトリックの手法になぞらえることが可能になる。古典的なレトリックの規準である「創案」(invention)・「配列」(arrangement)・「文体」(style)・「記憶」(memory)・「所作」(delivery)をもとにして説得の文脈から政治漫画の技法を提示したメドハストとデソーサ (M. Medhurst & M. Desousa) は、演説のレトリックとは上述の規準において若干の相違はあるものの構造上ほぼ類似しているということを実証した (Medhurst 1981)。とはいえ、言語では各言語の違いによる共通理解への障害があるのに対して、画像にはそれがなく「国際的」である。反面、同一言語を用いる人々の間でも共通の理解が得られない画像もある。このような活字と視覚情報との差異を考慮して、受け手の反応を誘う具体的な方策(五つの下位範疇)のレベルでは画像独自の特徴をレトリックとして持つとメドハストらは述べている。この点をふまえて政治言語の諸前提と政治漫画の諸機能とを比較してみよう。

政治言語の基本的な前提として、エーデルマン研究の第一任者であるロスマンは次の四項目をあげている (Rothman 1981, pp. 312-313)。

α: 言語と経験と意味との間にある人間行動を知るための手がかりを探ることが政治のダイナミックスを知ることになる。

β: 言語は役割取得を通じて人々の間にある種の世界を共有させる。

γ: 大衆は「事実」や人格によりも、状況をドラマ化する身振りや言い回しというシンボルに反応する。

δ: 社会が提示する政府への議題設定は、正しい叙述ではなくても社会の人々の持つ政府への期待を語っている。

この信念や期待が国家の秩序を維持する。

αについては既に説明を加えた。βは、「絵画の文法」の理解を人々に促す「主題設定」（「創案」の技法の内実）という修辞技法によって促進される。この政治漫画では何がテーマになっているかを読み手の引照基準に引掛かりやすいようにする手立てである。選挙を表わすのに戦国武将の姿を候補者にさせたり、舞台背景に「必勝」のダルマを描いたり、あるいは大衆・有権者の政府への期待を象徴するものとして料理が給仕されるのを待つレストランのお客を描くような例があげられる。これらは、「政治についての常識」「文化的な示唆を目的とした要素」としてレトリックの類型に含まれる。

γについては、レトリックそのものをさしているともいえる。また、詳細な表現技巧をさしているともいえる。しかしながら、政治漫画はこの政治言語の政治的前提としての特徴を絵画という視覚情報で「暴露」してしまうことがある。PKO法案の通過に法案の成立を「喜ぶ」政治家の姿を誕生直後の「赤ん坊」（PKO法）をとりあげる医師として描いた政治漫画があった。この無神経な構図をそのまま政治漫画にすることでPKO法のもつ問題点を「暴露」している。さらに、政治漫画内の文字情報（見出し、フキダシ、説明語句など）と画像との関連や、政治漫画が掲載されている新聞の記事・論説との相互関係をみれば、文字情報のもつ政治言語性を政治漫画がテーマにおける対立や事実関係の暴露によって払拭していこうとする作品が政治漫画に見られることがある。「国際貢献」という言葉がもつ甘美な響きと裏腹に、それに付随する「国連中心主義」の内実がアメリカ追従主義であることを国連場で大統領や星条旗に詔う日本の首相の姿を描く政治漫画の見出しが「国際貢献」であるならば、上述した特徴の例となりうる。

δは人物・事物の配置の工夫によって体现される場合が政治漫画では多くみられる。上が開いている箱のなかで「争い」が生じ、政治家が、ヤクザが、札束が、病人が、それぞれ飛びかうのがみえる。その箱の外には「国会議事堂」と「㍿」の印のついた袋がじつと腰をおろして待っている。このような政治漫画には、汚職事件の審議紛糾になかば

呆れ顔で耐える国民の気持ちをじっと待つ国会議事堂と予算審議の要求の袋に象徴させている。⁽⁸⁾

以上のように、政治言語の概念の基本前提が政治漫画のレトリックの一部として反映されている。エーデルマンの知見の包括性を例証する結果となった。言語に内在されている政治的特質を例証するものとして非言語的要素(絵画、映像、政治行動そのもの、政治的儀式)が存在し、逆に非言語シンボルの説明に言語的特質が用いられる。このように、政治儀礼と政治言語は政治シンボリズムの領域に限ってみても、政治漫画と相互作用性をもつと考えられる。

(2) ラスウェルも政治言語に関する研究は、『政治の言語』(The Language of Politics)の著作にみることができ。しかし、ラスウェルのそれはエリートによるシンボルの操作としての政治言語に関心の焦点があり、かつ、過去のシンボルが現代においていかに実効性を欠いたものであることを例証することに主眼があった。これに対してエーデルマンは、政治言語によるエリートの大衆操作という面を拡張し、レトリックの言質と結果として生ずる政策との比較をすることから、大衆の政策への黙従、現状への肯定を生み出す力に政治言語が利用されていることをより包括的に示した。

(3) たとえば、自民党と社会党との連立についてみると、『反連立(反新生党)』を旗印に連合が進んだが、五五年体制の役割分担の「コード」が現実化したとみることができる。

(4) 政治的リーダーシップ、「正論と俗論の政治過程」(京極1983)、支配と被支配の関係、にそれぞれ関わる問題である。

(5) 「国際化」シンボルを例にとると、自治体や政府が「国際化」と称して在住の外国人を対象にイベントを開催するが、その催しは一過性であることが多い。対象となる外国人は民族・人種的な偏りがあっても構わない。ともかく、外国の人と接することにより「国際化」は満たされ当事者や集団に「安心感」が培われればよい。このような「国際化」シンボルの使用はよくみられる。

(6) 政治儀礼、政治言語とともに政治漫画の環境を構成する。けれども、政治儀礼は政治漫画が批判すべき雰囲気醸成するのに対して、政治言語は政治漫画の各構成要素間の相互連関をつける「接着剤」としてはたらく。

(7) この「定番」を覆すことから、政治儀礼を攻撃の対象とする手法がある。「笑い」による政治儀礼への攻撃がそれである。ただし、政治社会の既存の文脈(基本構造)に抵触するものでなければこの「笑い」による攻撃も効果はない。「笑い」そのものも儀礼にとりこまれることがあるからである。

(8) もっとも、この政治漫画の場合には、汚職問題の真相究明という「政府への期待」が隠蔽されているので、描き手の立場表明とい

う解釈もあながち捨象することはできない。

3. シンボル操作研究の流れ

エーデルマン以降の政治シンボル研究は、三つの流れに分けられる。①政治的統合におけるシンボルの分析、②政策過程におけるシンボル研究、③政治コミュニケーション研究でのシンボル。これらはシンボルの理論的分析というよりも、政治現象の実証的研究から抽出されてきた点に特徴がある。本節ではこれらの諸研究を「シンボル操作」研究と一括して論じていくことにする。

政治統合におけるシンボル研究は、政治言語の分野ではミュラー (Claus Mueller)、政治儀式の分野ではミッテル (William C. Mitchell)、ベネット (W. L. Bennett) をあげるべきである。

ミュラーは、社会言語学の蓄積をもとにして政治体制や社会階級と政治言語の関わりを論じた。彼は、政治体制の正統性信念の成立要件として、自己の利害の明確な表明とその充足と、社会成員間の連帯感を生じさせる価値づくりの二つをあげる。政治体制を支持する態度形成の説明として、「歪曲されたコミュニケーション」概念を導入する。外的な諸要因によってコミュニケーションが歪曲され、利害の表明が阻害され体制への従属を招くとしている。言葉の定義や使用方法が政府によって制約される「強制指導型」、自分の生まれ育った環境が言語の運用を制限する「環境制約型」、政府の利害保存のため自ら制限を加える「管理抑制型」の三つに分けられる。このなかで、「環境制約型」では家庭での社会化とそこの言語コードが認知・態度に影響を与えるとミュラーは述べている。この制約が、下級階級には効力が大きく体制への支持を生み、上層中流階級にはあまり効果がなく体制への批判を生みやすいと考えるのである。「管理抑制型」では、近代化に伴う行政権の強化が政府のコミュニケーション支配権を拡大させ、民衆の

政治参加を歪曲されたコミュニケーションで阻害する。反面、行政権の拡大が日常生活へ浸透することが政府の支配力を顕在化させることにつながると、それを見抜く余裕のある人々が政府批判をしやすくなるとも彼は述べている。

政治言語をより大きなコミュニケーションという範疇から論じているところに、政治的コミュニケーションへの志向性がうかがえる。問題は社会階層の流動性についての考慮がされていないことがまずある。すくなくとも「中流意識」を幻想でも感じさせられる日本のような社会では、流動性があるともいえるし、ないとしても「中流意識」の幻想を成立させる要因の考察が求められる。また、行政権の拡大は「深く静かに」進行しているのでそう簡単には「政府の支配」を実感することはできない。この点は一コマとしての政治漫画の注目度の低さと、「マンガ文化」とよばれる雑誌マンガの隆盛の対比とも関連すると思われる。日常生活への関心の高い層をミューラーは文化階層であるとしているが、文化階層自体が営利を追求することに終始したり、そもそも政治的発言力を持ちにくい状況におかれることへの視点が欠けている。シンボルが価値体系にどのくらい影響を与えるのが検討される必要があるだろう (Mueller 1973)。

価値体系への政治シンボルへの影響についての考察は、政治儀礼の分析にみられる。ミッチェルは、シンボルの統合力に着目し構造・機能分析を利用して行動を規定する信念体系の構成の検証を目的としている。彼は、政治文化を社会の信念と作業基準と規定し、政治体制への要求・期待・支持の源泉となるものであるとしている。政治文化における信念体系の浸透は、社会・政治体系の防御の役割をはたすのである。この信念体系にシンボルは情緒・倫理に訴えかけていくのである。ミッチェルはアメリカの信念体系をリベリズムと規定して、この信念体系の反映が合衆国憲法であり、大統領制であるとする。ここにおいて大統領が演ずる政治儀礼の正当性はリベリズムに基づくものでなければならぬと述べる。リベリズム自体なぜ信念体系と化したか、信念体系の変動はないのかという点があまり明瞭ではないという問題が残っている (Mitchell 1962)。統合シンボルの力を「市民宗教」を事例にして例証したの

がベネットである。彼は「市民宗教」を「社会関係と市民の義務の定型を産んだ」と評価し、それに使われた中心のシンボルが曖昧であったことが成功の要因とみなした(Bennett 1979)。基礎的な政治原理を曖昧につかうと、出来事の当初あった個々の知覚の違いは調整され、個々の強調点や関心はばやけ、結果として同意が生ずる、と述べている。このような同意が公共の儀礼(public rituals)に参加することによって得られ、「暗黙の市民の資格」となる。この儀礼のなかでの行動を模倣すると、「国家の確固とした手続きと合法性のもとになる客観的事実と当然視されるもの」を生み出すとしている。社会規範やモラルの喪失が嘆かれている現代の日本では、統合シンボルが「自治」や「コミュニティ」、「町内会」といった装いをもって登場するのではないか。規範が「公共の儀礼」を通じて急激に形づくられることへの恐怖をもつ必要があろう。

政治過程におけるシンボル操作を分析したのがコブとエルダーである。シンボルの統合機能は政治過程のなかの「見物人」にも「重要な意思決定者」にも影響を与えるとともに、集団内の関与感を増大させる、と述べる(Cobb and Elder 1972)。シンボル操作の形態は、喚起、挑発、諫止、賛同など多岐にわたっていて、リーダーとフォロワーとの接触が希薄になっている(国会議員に直接接触できる一般人の数を想像するとよい)現代の政治状況ではより重要な役割をシンボル操作がもつことになる、と指摘する。彼らは、シンボルの機能をより政治心理学的アプローチから考察するようになる(Cobb and Elder 1983)。彼らは政治システムにおけるシンボルの重要性を検証するところから、政治を「反合理的(apolitical)」過程と位置付ける。これは「バラバラの情報や曖昧な手がかりを予見と変動しやすい個人の選好から解釈する」過程である。この予見可能性とならんで、彼らはシンボルの概念、発生源、指示対象とその関係、政治シンボルの類型、をそれぞれ検討する。それから、情緒の面でのシンボルとの関与の仕方に言及する。ここにおいてシンボルが運ぶ「感情」には「電荷」があるという説明がされる。予見可能性に基づく政治の規定は、情報理論のモデルを連想させるし、特定シンボルにつく「感情」との関係は「スキーマ」理論に対応する。政治漫画研究にお

いても、特定感情が特定の技法に対応することを統計的手法で解析する道がこのコブ・エルダーの研究から触発される。

選挙キャンペーンの研究を中心に、政治的コミュニケーション研究にシンボルの分析を進めていったのがニモ(Dan D. Nimmo)である。彼は政治的知覚にシンボルがどのように影響を与えているかを、説得コミュニケーションの知見をもとに論じている。現代の政治に対する大衆の低い関心を変えるために、マス・メディアが大きな役割を持つ、とした後、マス・メディアがメッセージの「型」を強調し「イメージ群」(imagery)をつくる、としていた。ニモはコミュニケーション論で言う「送り手」研究に傾倒したように思える。政治環境がメディアによってのみ知覚されうると考えたところにもあらわれている。ここにおいて、専門家によるキャンペーンが投票行動に影響し、メディア・政治専門家の作り出す「イメージ群」は作為性が強まってドラマ性を帯びる。ニモは政治のドラマ的視点にも道を開いたといえる。また、政治とメディアとの関係に政治シンボル論を介在させたところにニモの特徴がある。